# 船井情報科学振興財団 留学生レポート

2015 年 12 月
下 英恵

University of CambridgeのDepartment of Biochemistry/Gurdon Instituteに在籍中の下です。8月に無事First Year Viva (1年目の研究成果および今後の研究計画に関する口頭試問)を通過し、無事博士課程2年目に突入しました。この報告書では、一年間ケンブリッジでの研究生活を通じて感じたことについて報告させていただきます。

## 留学１年目で得たこと

私が今の研究室を選んだ大きな理由として、研究環境、そして人の良さというのがありましたが、一年間を過ごして、本当に想像していた以上の優れた環境に恵まれたと感じました。研究機材・設備はもちろんのこと、研究所には研究者以外にもコアスタッフ（よく使う試薬をつくって下さるスタッフや、情報処理や顕微鏡の専門家、動物の飼育係など）がついているため、自分の実験に費やせる時間が非常に多く、研究が捗りやすいです。また、日本ではなかなか会えなかったであろう、著名研究者とセミナーで会って議論をしたり、夜一緒にパブで呑んだりもできたりするため、自分のプロジェクトに対してプロフェショナルなインプットもたくさん得られます。先日私が発表をした所内のランチセミナーでも、2012 年度ノーベル生理学・医学賞受賞者のジョン・ガードン教授に直接質問を受けるなどのこともあり、このような貴重な機会は、日本に居続けていたらきっとなかっただろうと思います。

また、日本の大学研究室との一つの大きな違いとして、海外の研究室はローテーションや、数ヶ月のプロジェクトをしに来る学部生や研究員が多く、非常に構成メンバーの回転が激しいため、ダイナミックさを感じます。私の所属する研究室も、私が昨年来てから 2 人が去り、さらに新しく 5 人のポスドクが加わり、その間も 3 人の学生が一時的に所属していました。新しいメンバーが加わると、新しいプロジェクトが始まったり、ミーティングや議論で新しい視点やアイデアが加わったりするので、とても刺激的です。

さらに、ヨーロッパで生活するようになって世界観や視野の広さが変わったように思います。今年一年は、パリでのテロ事件、シリアの難民問題など、ヨーロッパでは様々な政治・社会的な出来事がありました。日本にいた頃は、そこまで私生活に影響がなかったような話も、今やそのような事件と深い関わりのある友達や同僚も身近にいるので、全く他人事ではなくなりました。このようなヨーロッパ事情の話は、毎日のお昼やお茶の時間でも頻繁に話題に上がるので、全員でディベートしたり意見を出し合ったりする中で、段々他の国の人の考え方や価値観がわかってきました。日本国民としてだけではなく、global citizen のような考え方に少しだけ近づけたのも、留学 1 年目の大事な進歩のように感じます。

## 期待と異なっていたこと

日本にいた頃は、海外の大学院の博士課程に進学する学生はきっと、将来教授や研究室のグループリーダーなど、世界で活躍する研究者を目指しているんだ、と思い込んでいました。だがこちらに来てしばらくして、少なくともケンブリッジでは全員が全員、同じような目的で博士号取得を目指しているわけではないことがわかりました。

日本では、博士課程卒業後は大半の方がアカデミアに残るのに対し、ケンブリッジの博士課程学生の進学先は企業とアカデミアで半々、生命科学分野出身でも全然違う業種（コンサルティングや金融系等）へ進む方も多いようです。以前、同じ生化学科の修士課程に所属していた寮仲間がオックスフォードの博士課程進学が決まったので、将来の展望について聞いたところ、「博士号取得後は banking に進む予定」と言われて、（そ

れならなぜ3、4年間も研究に費やすんだろう…？と）とても混乱した記憶があります。ですがこれは決して珍しくはないようで、そもそも博士号所持者が世界一多いイギリスでは、研究職以外でも修士号・博士号を採用要件に含める企業も多いようです。

世界でもトップレベルの大学院にいても、アカデミアのポストを探すのに苦労する多くの周囲の研究者の実態を目にして、特に競争が激しい生命科学分野で生き残っていくのは難しいと判断し、博士号を研究の運転免許というよりかは、将来の選択肢を広げるためのものとして捉える学生も多いでしょう。そのこともあるためか、博士課程中での論文執筆や学会発表実現に対する意気込みは、現在所属している学科の博士課程学生よりも、日本の研究室の学生の方が強いように、個人的には感じました。

**女性研究者の生き方について考えたこと**

日本での学位留学説明会に参加したり、留学希望の女子学生と話したりする際に「海外の大学院に進学したいが、結婚や出産ができなくなりそうで不安」と相談されることがよくあります。これについては，私も出願する前は同じように色々悩んでいましたが、結局私は現在の夫とよく話し合った結果、渡英する半年前に入籍、4ヶ月前に挙式を上げて、一人でイギリスへ来る形を取りました。現在は日本で働く夫とは離れて暮らしていて、毎週末のスカイプ以外は、年に3、4回会う生活を過ごしています。

これを話すとよく驚かれますが、周りではそのようなケースは少なくありません。現に自分の今のsupervisorもボストンでのポスドクポジションが決まると同時に結婚し、ボストン-ロンドン間で3年間遠距離、同じ研究室の同僚もウィーン-ヴァージニア間で2年別居婚を経験しています。研究者である限り、two-body problemは避けられないハードルですが、本人たちの意志と周囲のサポートがあれば乗り越えられるものだと思います。自分の supervisor も先月、グラント申請準備で忙しい中でも第二子の妊娠を発表し、女性研究者の大変さをつくづく感じさせられましたが、研究と家庭の両立は可能ではあることもいつも見せられています。

元々自由人な私たち夫婦にとっては、この一年間はそこまで苦ではなく、お互い自由気ままに好きなことに没頭し成長できる時間となりました。もちろん向き不向きは人それぞれなので、決してパートナーとの将来計画に関して正解な選択肢はないと思いますが、女性の海外大学院進学＝結婚・出産が遅れるまたはできない、と思ってご自身の夢を諦められる女性の方が少なくなることを個人的には願っています。

**最後に**

今年は初めて身に付ける実験手法が多く、トラブルシューティングなどにたくさんの時間を奪われ、期待していた程の研究成果は出せませんでした。ですが、毎年恒例の研究所リトリート poster competition では最優秀賞を受賞することができ、少しだけ自分の研究の認知度が研究所内で広がりました。今年度は、学会発表や論文で発表できるような面白いデータをたくさん生み出せるよう、頑張っていきたいです。

秋のケンブリッジ

ラボメンバーと、研究所のクリスマスパーティにて